HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	戰時體制與日本語・日本研究
Author(s)	川島, 真
Citation	近現代日本社會的蛻變國際研討會（2006年3月16-17 日, 於中央研究院）
Issue Date	2006-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/11308
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	proceedings (author version)
File Information	taiwan_symposium_200603_academia_sinica.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

近現代日本社會的蛻變國際研討會
2006 年 3 月 16-17 日, 於中央研究院

戰時體制與日本語・日本研究

川島 真

◆台北第一師範学校・国府種武の北京行き

1940 年 5 月 15 日、国府種武は台北を後にして単身北京に向かった。周知の通り、国府は、『臺灣に於ける國語教育の展開』(第一教育社、1931 年)の著者で、台北第一師範学校などにおいて、およそ十五年にわたって台湾の日本語教育に従事した人物であり、台湾教育史などのジャンルで研究対象となっている人物である。国府は台湾を離れた理由を以下のように回想している。

> 私は昭和三年に大学を出て以来、実はその前にも大正十三年から十五年まで食卓でいたことがあるので、前後通じて十五年近く同じ台北第一師範学校(尤も台北師範学校、後にそれが第一、第二に分れた)にいて、あまり長くなったのでやや飽きて来たのと、台湾之教育にも漸く軍部に力が及んできて、どっちかというと自由主義の色が濃かった附属小学校もやりにくくなった上、校長の大浦精一が貴族院の菊地男爵の古文と称していて、毎朝白衣を着て官舎にこしらえた神棚を拝むという男で勢私と肌が合わず、あまり長居はしない方がいいと悟ったのもあり、実はそういうのはむしろ消極面であり、多面其の頃は友人台北帝大教授の中井淳と会えば中国の問題を論じ後にその尽力で昭和十四年十月には広州の工作に出かける程、心はもはや台湾をはなれ大陸に向っていたのである。これらが重なって私の北京行の決断を早めたということになった[1]。

国府を北京に呼んだのは、台湾総督府外事課長を務めたことのある坂本竜起・興亜院華北連絡部文化局長であった。台北での国府の給料は三百円、北京では五百四十円とのことであった。

国府が赴任を求められたのは、北京に組織された留日学生同学会が開設した興亜高級中学校という学校であった。ここは中国における初級中学校を卒業した者を三十名、二年半の定員で入学させ、中国の学制に則った教育をおこないつつ、日本語などを教えて、二年半後に日本の高等学校や専門学校に入学させようというものであった[2]。二年半と区切りが悪いのは、現在同様、日本と中国の学事暦が半年ずれていることに由来していた。ここの卒業生は、日本留学を負えた後、日本の華北統治を補助する官吏などとなることが期待されていた。

国府は赴任直後、「日本に対して今までの留学生教育の欠点を反省して貰う」ために、『学士会会報』に「留日学生教育の緊急問題－東亜新秩序建設の協力者たるべき者の教育の検討を投稿して巻頭で掲載された[3]。国府は、「実に留日学生教育は東亜新秩序建設に当り其の現地側の人的資源を供給すべき重大な任務を負はされてゐるのであって、留日学生問題は現下の重要問題の一つと言はねばならぬ」と主張、数多くの論点を挙げている。だが、国府が問題としているのは、基本的に当時の制度では「日本人」と「留学生」を同一の制度の下に置いてお

[1] 国府種武「北京興亜中学校の歴史」(『法政大学文学部紀要』14 号、1968 年)
[2] それ以前、中国人留学生は東京神田神保町にあった東亜学校で半年間日本語を学んだ後に、高等学校や専門学校を受験した。張金塗「戦前の日本における中国人留学生に対する日本語教育の歴史的研究－東亜学校を中心に－」(『日本語教育』1995 年 7 月号)参照。
[3] 国府種武「留日学生教育の緊急問題－東亜新秩序建設の協力者たるべき者の教育の検討」(634 号、1941 年 1 月)

り、「少しも留学生に特別の考慮を払って行はれてゐない」というように、留学生の重要性とともに、日本人学生との弁別を要求していた。入学試験における英語、入学後の古典教育などが具体的事例であった。
軍事的に日本に占領され、対日協力政権ができた地域では、その支配体制を支え、治安を維持していくためにも、日本語教育・日本理解が特に重視された。日本語を解し、日本を理解している人材は、占領者である日本と現地社会を媒介する存在と看做されていたのである。日本語教育や日本理解の促進事業は、単に教育機関だけでなく、社会活動においても特に重視されたのであった。この時期、中国から日本に送り込まれた人々は、1945 年以後、一定の期間をおいてから中国に戻り、文革の中で苦しい生活を送りつつ、やがて中国の日本研究を支えていく人材になっていく。これは筆者も、北京で朱紹文（北京大学経済学部教授）、李徳（北京外国語大学教授）らから実際に聞き取り、また鐘少華編著・泉敬史、謝志宇訳『あのころの日本－若き日の留学を語る』（日本僑報社、2003 年）などにも見られることである。
　本報告では、この華北の事例を交えながら、戦時下の「日本語」「日本研究」のおかれていた状況について説明していきたい。

◆日本語の位置

戦時体制の下、日本語、日本語教育は新たな段階を迎えていた。

> わが国の国語が外地に普及されるやうになり、随って、日本語の教育が振興されるやうになってから、既に、五十年の歳月が流れてゐる。しかして、この五十年の歳月の間に於て、日本語の教育が今日ほどはなばなしく提唱され論議された時代が他にあったであらうか。私見をもってすれば、日本語の教育が今日ほど提唱され、論議されて、随って、振興されてゐる時代は、将来は別として、過去に於ける日本語教育の歴史の上には見出されず、又、比較されるべくもないと思ふ[4]。

これが戦時下における日本語、日本語教育をとりまいている状況であった。鶴見祐輔もまた、「一国の文化が外国に伝はって拡ってゆく場合には、具体的には、三つのものを通して出てゆく」として、国語、文学、生活を挙げた上で、「今日、日本の前にある現実の問題は、日本語を如何にして、大東亜地域全部の共通語となるべきかといふとである。私は日本語を世界語にする日の来らんことを、三十一年の昔ふと米国の写真で思ひ浮べて以来、夢寝も忘るる能はざる思慕として、この問題を考へつづけて来た」と述べている[5]。
　昭和十六年四月、日本語教育振興会は、雑誌『日本語』を創刊した。創刊号は「東亜文化圏と日本語」と銘打たれ、以下のように「東亜文明圏」における日本語の重要性が提起された。

> 雑誌『日本語』は、熟誠・達識の士が、日本語及び日本語教育のために行ふ凡ゆる実践の、刻々の記録となるであらう。そしてこの記録の成長は、東亜文明圏建設の進捗を、最も明快に物語る筈である[6]。

他方、「大東亜文化」建設と日本語も密接に結び付けられた。

> 各民族は夫々の文化を有するのであるが、大東亜文化は、共栄圏の異なる民族文化を横の

---

[4] 篠原利逸「日本語教育の基礎的問題－新中国の日本語の普及について」（『日本語』第 3 巻 10 号、1943 年 10 月）
[5] 鶴見祐輔「大東亜文化建設の課題」（『日本語』第 3 巻第 3 号、1943 年 3 月）
[6] 松尾長造「発刊の辞」（『日本語』創刊号、1941 年 4 月）

線とし、我共栄圏精神を縦の線として一貫せられるものである。この一貫せらるべき文化の真髄であって、これが理解と実践とは日本語を以てその根基となすのである。…日本語が、少くとも英語の現状に於ける流通程度に使用されるやうになれば、我国の政治・経済・文化の諸工作が比較的容易に行はれ得るのみならず、これは共栄圏諸民族の向上に必須の要件なのである[7]。

日本語はいわば共栄圏の共通語として位置づけられたのである。それについては、既に英語が国際共通語としての地位を確立しつつあり、英語にとってかわることが想定され、さらには中国においては共通語としての中国語普及が十分でなかったために共通語としての日本語の普及が想定されたのであった。

編輯部　日本語を単なる外国語として考へないで、大東亜共通語として考へるといふことはどうでせう。

藤村作　日本人はさう考へるわけですけれども…。

佐藤幹二　それには国力が背景になってゐなければ…。

藤村作　私が行った当時学院長から「日本の方々は日本語を大東亜の共通語にするのだから、お前たちの言語は今になくなる。だから日本語をやれと仰しやるものだから、みんな反感を持って、学ぶ気持ちがなくて困ります。」と言はれたのです。それで、私は「日本語は外国語なり」といったのです。すると、それを聴いてゐた人々は、「私どももさう考へてをつたけれども、明かにはいはれないことだと思ってをりました。」といはれたくらゐ、くひちがひがあったのです。

編輯部　日本の方針としても、最初から現地の言葉を、それぞれの民族の母語を尊重し、その上に共通語として学ばせようといふのにちがひないでせうが。

藤村作　同じ支那のうちでも北方から南方に旅行すると、非常に困るといふ。上海に行くともうわからない。広東あたりになるともっとわからない。汪精衛などの話が支那人にもわからないさうですから、共通語として日本語を英語に代わらせる必要があるといふことは、大いにいっていいのですよ[8]。

このように、日本語は各地の母語を駆逐しながら普及していくものとして受け入れられる面があった。また、「日本語が海外に進出すること、大東亜共栄圏の共通語とすることは、今日においては支那事変の処理、大東亜共栄圏の建設と共に、今や一億日本人の希望でも理想でもなく、現実となりつつある、否現状である」などとも評される中で、同時に外国語無用論、さらには翻訳国営論など、外国語をめぐる管理が提唱された。言語の管理は、戦時体制の強化と共にいっそ強化され、そうした方向を採る議論がましていった[9]。

---

[7] 松宮一也「共栄圏文化の拡充と日本語」(『日本語』第二巻第五号、1942 年 5 月)

[8] 座談会「北支における日本語教育の新段階」(『日本語』第 3 巻第 11 号、1943 年 11 月)

[9] だが他方で、画一化よりも個別に柔軟に対応すべきだとする見解も見られた。一つの比喩として、「日本の外人観光コースがすべて一定してゐるのはどうかと思ふ。教育家の学校参観なども殆ど指定校があるといった状態にある様に聞いてゐる。まづ相手の専門、嗜好などによって、それに適はしいものを選んでやるのが、こちらの手腕である。…アメリカ人がほめたからといって、日光をタイ人に見せるのは考へ物である。経済使節の一員は、帰国後、実に小さなもので、われわれの寺院に比すべくもない。美しさ、精緻にとっても劣ってゐる。そして、三越、白木屋、高島屋と大きな百貨店の相接してゐることに驚嘆してゐる。ある支那人は、神社仏閣を訪ねてさしてと思はなかったが、たまたま案内された塵埃焼却施設を見て、日本人の清潔、衛生に感嘆してゐた」というように、欧米向けの日本のアピールポイントとアジアに対するそれの相違を指摘する言論もあった。石黒修「日本語の対外進出」(『国際文化』1941 年 10 月号)。

周知の通り、日本本土、そして植民地において、日本語は「国語」と位置づけられていたし、満洲国でも日本語は中国語、蒙古語とともに「国語」であり、法律上の解釈などに疑義が生じた場合には日本語に依る、とされていた。満洲国では、語学検定試験規定が 1937 年 12 月 28 日に設けられていた（日本語、ロシア語、満洲語、蒙古語）。そしてそれに合格すると、それに応じて手当てが支給された（特等で二十円、一等で十五円など）[10]。

領土（本土）でも植民地でも、またあるいは対日協力政権の統治地域でもなかった関東州では、また別の議論がなされていた。1944 年には、「日本語」を「国語」へと名称を変更することが議論されていた。国語と日本語の相違については、当時からさまざまな議論があり、日本語が純粋に言語としての意味であり、国家の言葉となると国語というなどというものもあったが、「教育」の面から見れば、日本国民に対して日本語教育がおこなわれることはなく、あくまでも国語教育であった[11]。当初は、「新国民」と呼ばれた植民地臣民に対する教育は「日本語教育」と呼ばれたが、留学生が増加し、また対日協力政権なども各地で拡大していく中で、植民地では「国語教育」「国語家庭」などというように、「国語」が使用されるケースが多く見られ、留学生関連事項や対日協力政権などでは、「日本語」が多く用いられるようになっていた。だが、関東州はその中間に位置していたのである。

> 一年前頃にはまだ「国語」説に対して否定的な意見が優勢であった。皇国の領土にあらざる地（関東州は租借地である）にあって、皇国臣民にあらざる人々に対して、日本語を「国語」と称することは不合理であるといふ論議が、満洲国において日本語を「国語」としてゐるやうな政治的見識に立つ新しい合理性の主張に対して耳をかさず、実は州人の感情に対する政治的顧慮と一方に結んで、その決断に賛同をあへていえなかったのである[12]。

1943 年まではこのように考えられていたものが、戦時動員が強化される中で「国語」への変更が望まれたのである。そこではもちろん、「日本語によって日本的精神を形成すると意図せられる時、生活活動としての日本語の力に最も注目せられなければならない」という考え方があった。そして、「朝鮮台湾において、皇国臣民たるの立場に対して国語の教育が施され且受入れられてゐるに対して、関東州において直ちに同様の状況が現出するものと期待するのは早すぎる」と思われながらも、「『国語』を以て州人を皇化の民たらしめる」ことが想定されたのであった。

他方、国語、日本語の双方においては、国語教育・日本語教育が重視され、台湾、朝鮮半島、中国大陸それぞれの場、あるいは留学生に対する日本語教育の成果、あるいは教育経験、それぞれの地域の日本語の典型的誤用例、また「ピジョン・ジャパニーズ／混淆日本語」の状況などが報告されていた。

> 従来日本に於ても国語教育といふことは、教育上常に重大な問題として取り扱はれて来た。然しながらそれは主として日本に居る日本人の為の国語教育に終始して来たに過ぎないと云ふことが出来る。ところが今日では日本語はもっと広い観点から考へられなければならぬ時代となったゐる[13]。

そうした中で台湾は、「共栄圏」において、国語／日本語教育がもっとも早くから始められた地とし

---

[10] 森田孝「満洲国の国語政策と日本語の地位」（『日本語』第二巻第五号、1942 年 5 月）、松尾茂「満洲国に於ける日本語教育の現状」（『日本語』第四巻第五号、1944 年 5 月）

[11] 久松潜一「国語教育と日本語教育」（『日本語』第 1 巻第 3 号、1941 年 6 月）

[12] 大石初太郎「『日本語』より『国語』へ－関東州に於ける日本語教育の現状－」（『日本語』第4巻第5号、1944 年 5 月）

[13] 西本三十二「海外で感じた日本語の問題」（『日本語』第 1 巻 8 号、1941 年 12 月）

て、その教育経験は特に重視され、台湾における日本語は、すでに「日本語のひとつの方言」だとも言われているようになっていた[14]。ただ、このようなピジョン化は必ずしも共栄圏では歓迎されていなかった。満洲国でラジオとタイアップした「全満国民学校　国民優級学校　日語朗読大会」がおこなわれていたように、「正しい」「標準的な」日本語の普及が重視され、教員の方言、訛りなどが問題となった。その上で、「標準語」を提供し続けるラジオ・アナウンサーの存在が重要と成ったのである。

> 日本語が共通語になり異民族の間に於て使はれる場合に正しくない日本語が行はれる事を警戒する必要があります。敬語抜きの日本語やピジンイングリッシュ式の日本語出来ては大変です[15]。

だが、このような日本語（教育）をめぐる状況は、さまざまな効果を日本側の「国語」などの教育にもたらした。たとえば、日本の国語における古典教育をそのまま外国人にも適用するのかという問題や、漢文の訓読などを中国人留学生に教授するのかといった問題を生み出していた。だが、こうした問題に定見が得られるには戦争の期間は短かったのである[16]。

次に、日本語教育の担い手である教員について見ておきたい。教員については、「正しい日本精神を持ち、日本文化の裏づけを持った日本語」を教える必要から、「先づ第一に真の日本人でなければならんということが根本問題として当然のことで」、「日本人でない人が日本語を教へることは出来るかも知れないが、それでは私の考へてゐる日本語普及にはならぬ訳です」などと述べられる面もあったが、それと同時に「日本語が本当に普及するやうな時代になって来るとむしろ現地人がやってくれると思ふ」との将来像が付加された。

> 要するに日本の実力といふものがだんだん出来て共栄圏の建設が着々その緒に就いて来ますと、彼らの間に自から日本研究といふものが今現に起こって居りますが、それがどんどん多くなって来るわけです。日本語研究といふことも自然起こってくる思ひます。…日本研究が盛んになって日本を研究するためには日本語を研究しなければ問題にならないので、当然のこととして日本語普及などといふことは言わなくても行はれる。よい日本語を習はなければ日本の研究が出来ないので、自らよい先生のところに行く[17]。

◆日本文化・日本研究の位置

戦時下において、日本語を媒介とした日本文化の受容が「共栄圏」において重要視されたことは言うまでもない。だが、それは、単に内的な統合の論理として認識されたわけではない。そこでは、「国内原理としても世界原理としても従来の西洋的な原理は破綻に瀕している」という認識の下に、「世界的なものといっても日本的なものを離れてあるのではないと同様、日本的なものであっても固定したものではい」とされ、「日本精神と現代世界との統一こそ真の世界文化である」というようにその普遍性に期待がかけられた。「世界文化はかくて日本文化そのものにとって内的であると

---

[14] 川見駒太郎「台湾に於て使用される国語の複雑性－附、方言の発生」（『日本語』第 2 巻 3 号、1942 年 3 月）、他方朝鮮にあっては、朝鮮半島での徴兵制施行に伴って、「国語」がいっそう重視された。島田牛稚「朝鮮における徴兵制の実施と国語対策」（『日本語』第 4 巻第 2 号、1944 年 2 月）

[15] 座談会「日本語教育の根本問題」（橋本進吉の発言、『日本語』第 4 巻第 1 号、1944 年 1 月）

[16] 座談会「日本語と日本文化」（佐藤春夫ら参加、引用部分は奥野信太郎らの発言、『日本語』第 1 巻 4 号、1941 年 7 月）

[17]座談会「日本語教育の根本問題」（東光武三の発言、『日本語』第 4 巻第 1 号、1944 年 1 月

いふことが出来よう」と考えられた[18]。これは日本の思想戦における一つの考えたでもあった。

日本研究もまた重要な位置を与えられていた。実際、1930 年代半ばまで、中国では数多くの日本研究関連雑誌が出版されていたが[19]、これは「敵国」としての日本を理解しようとしたり、あるいは融和路線を目指そうとする集団によるものであった。日中戦争の開始後の重慶における日本研究については、今後の研究課題であろうが、日本の占領地区、対日協力政権の統治地域においては、日本理解、日本研究は（もちろん当局の出版言論統制の下、また当局の指導の指示の下）推奨された。そこには日本語教育同様、「宣撫」が深くかかわっていた。読売新聞社東亜部長であった村田孜郎は、中国の国民性を理解したうえで、中国語を利用して「誤れる日本観の訂正」をすべきだと主張していた。確かに日本語は重視されていたのであるが、それでは宣撫効果に限界があるので、中国語による宣撫が有効だと認識されていた。村田によれば、

> 要するに今日まで、支那に紹介された日本といふものは『日本は恐るべき国である』『暴虐なる侵略国である』『人情なき野蛮の国である』『好戦国民である』といったやうなことばかりで芸術の国、人情の国としての日本は全く抹殺されてしまった。…文化工作報道放送によいては先ず第一に彼らのかうした誤った日本観を根本的に打破し、平和な美しい人情日本、芸術日本を彼らの面前に提供[20]…

すべきだというのであった。中国の日本理解に対する絶対的不信感とでもいうものがあったのであろう。そして中国の日本理解については、実藤恵秀が「日清戦争後、留学生がたくさん来るやうになるまでは、日本語研究はしかしながらさほど切実な問題ではなかったから、明代とくらべて進歩したとはいへない」と述べるように、明代以後の日本語、日本理解が清末に進んだという見解もあった[21]。しかし、下のように、この明治四十年の日本観、日本理解が 20 世紀前半まで引っ張られてしまっているという批判もあった。

> 大岡保三　…現代の日本人は中国に関して清朝の末頃の事より知らない、中国は何時もああいふ国だと、日清戦争、北清事変頃の中国を考へてゐる。又、中国のほうでも、今日枢要な地位に居られる方々は、多くは日露戦争後留学生として日本に見えた人々であって、さういふ人々は大体明治四十年頃の日本ばかりを知って居られて其後三十年間の躍進的な日本の発達を余りご存知ないのであります。要するに日本人も中国人も相手方の国情に関して三十年前の事のみを知って、現代の事を知らないのでありまして、これが今度の事変を引起す、重大な原因だと思ふのであります。…（中略）
>
> 釘本久春　奥野先生どうでございませうか。先程日本人も中国人もそれぞれ現代の日本と中国との理解が余り十分でなかったから恨みを買ったといふ大岡先生のお話があったのですが、日本の文化なり日本の歴史について現代の中国の青年達が一番興味を持って居るのはどういふ時代なんでせうか。やはり明治維新以後です

---

[18] 船山信一「新世界文化と日本文化－論理の問題を中心として－」（『国際文化』1941 年 10 月号）

[19] 孫安石「戦前中国における日本・日本語研究に関する資料の調査報告」（『神奈川大学言語研究』25 号、2003 年 3 月）

[20] 村田孜郎「対支文化工作と報道放送」（国務院弘報処編輯『宣撫月報』〈放送特輯号〉第四巻第八号、康徳六年＝一九三九年九月号）

[21] 実藤恵秀「支那人の見たる日本語－支那人の「怪奇日本語」」（『日本語』第 2 巻第 10 号、1942 年 10 月）実藤は、日中間における同文同種という物言いについては疑義を呈し、「同文の不同文」だと評していた。このほか、菊沖徳平「支那人の日本語研究」（『日本語』第 4 巻第 3 号、1944 年 3 月）なども、機械的言語習得ではなく日本人の精神を身につけるための日本語学習という観点からの言論として興味深い。

か。

奥野信太郎　日本がどうして発展したかといふことについて興味があるやうです。併しそれの深い遠因を究めるといふことはないだらうと思ふのです。やはり明治維新後、それも特に二大戦役を経て列強の一に進展した日本の姿に心を惹かれてゐると思ふのです。

釘本久春　それに対して良い翻訳なり、その要求を満たすやうなものが中国の日本研究家、或は日本の方で支那文学、支那語研究家何方からでも出て居るのでございますか。

奥野信太郎　無いと思ひます。けれどもその点は、さういふことは構はずに日本の標準で日本の学界で一流のものはやはり向ふの学者は褒めて居ります。だからはそれは考へないでやはり日本の標準でも差支えのない一流のものを日本の学者がどしどし出すといふことが一番宜いぢやないかと思ふのです[22]。

ここでは中国に即した日本研究が、日本本土とは異なるかたちでおこなわれることは想定されていなかった。ここには日本の文化、研究などが、普遍性を有しているという確信があったものと考えている。

もう少し中国人が日本理解に関する見解を見ておこう。1939 年、市村瓚次郎、白鳥庫吉らといった代表的な「支那学者」がおこなった「支那学者時局を憂う座談会」における対話を見よう。小見出しは「日本を知らぬ支那人」となっている。市村はこう述べる。

（明治二十五年の訪中の逸話として－筆者注）…それで上海に行って、上海見物して、それから南京の市中を巡回して、…その格好で南京市中を歩いて居ると、珍しいものだから沢山の見物人が来て、「カオリ」（高麗）「カオリ」といふ、何のことかといふと朝鮮人のことなんです。服装からさう見たのだらうね。それで一緒に行った人が朝鮮人ぢやない、日本人だといふと、日本て何処だといふのだ。（笑声）そこで日本といふのはカオリの東方に在る、とかう説明した、さうすると質問して居った支那人が「中国の属国か」と言った。（笑声）さういふような時代であったのですね。…その「中国の属国か」といふのを聴いて、とてもこれでは日支提携は出来ない、どうしても支那人に日本といふものを知らしめる必要がある、と痛感したのです。…

こうした状況を克服していくために、たとえば白鳥庫吉は「支那人をあっと言はせるには偉いところを示さねばならぬ」と延べていたし、上述のように日本の良書は海外にも普及していき日本の文化の紹介に役立つという考え方もあった。他方、和田清は、「とにかく日本は西洋の学を一歩でも先にやったから、支那人が感心して居る。留学生を送ったり、頭を下げて居るのは、さういふ点にある」とし、「西洋風の学問、それでもって指導して行くのでなければ、若い支那人はついて来っこないと思ふ」とまとめている（だが編集部のふした見出しは、「日本学を以て支那を導け」である）[23]。

実際の「日本研究」の推進については、共同研究、研究助成、教育などを通じておこなわれると考えられていた。共同研究については、東亜文化協議会、日満文化協会などを通じておこなわれていた。また教員の交流、芸術家の交流などをはじめ、人的交流は積極的におこなわれ「巡礼圏」を形成していた。ここには和田が批判するように、「論語の読みっこや孟子の暗記でをしようと

[22]座談会「日本語と日本文化」（『日本語』第 1 巻 4 号、1941 年 7 月）
[23] 座談会「支那学者時局を憂う座談会」（『文芸春秋』1939 年 1 月号）

思っている。そんなことをすれば恥をかくだけで、それでは到底駄目」という面もあったのだが、理系の科学性を強調する研究や教育もあわせておこなわれていた。

他方、日本研究それじたいについては、日本における各研究成果が広がっていくことも想定されていたが、他方で共栄圏の各地で研究がおこなわれることも想定されていた。

> 日本語科（古典科、人文科を含む）は語学力の涵養とともに、これとにらみあはせて主として日本語学並びに日本を対象とする学問－日本学とでも称すべきであらう－の教授を目的とする。留学生にとって日本語関係の教室は言語活動の道場であるが、わたくしどもの程度の学校では学生相互の日本語による共同研究の方法を、講義と併用することが望ましい。これは語学としての日本語のためばかりではない。日本並に日本文化についても、その研究は学生の中からわきあがって来る探求の精神に俟つべきであって、指導者も共に学ぶ姿勢が必要である[24]。

こうした「日本学」の可能性もまた頻繁に議論された。だが、「日本学の根本思想と云ふか基礎観念と云ふか、根本の点は日本の国体と云ふことにあるので、日本学は之から出発して行かなければならなぬことだけは議論の余地がない」などとされるように[25]、ジャパノロジーやジャパン・スタディーズと比定されるものとは言いがたかった。だが、それでも外から日本が日本を単位として研究されることを想定し、それを推奨しようとしたことは確かであろう。

◆華北における状況－事例研究として－

このような日本語教育、日本研究が推奨される中で、実際にはどのようにそれが展開されたのであろうか。これについえは、既に石剛『日本の植民地言語政策研究』（明石書房、2005 年）など多くの研究成果があるが、ここでは華北を例として考えて見たい。

日本は日中戦争勃発後、華北を占領しそこに対日協力政権を作り、後には汪政権の一部として位置づけながら、間接統治の形態を採用した。ここでは軍部はもちろんのこと、「新民会」という組織が対社会工作、宣撫工作などを担当した。ここにおいても日本語教育、日本理解の促進が大きな課題となっていた。そこでは、街頭における日本語教育、仕事場、公共機関による日本語教育など様々な場が設定され、さらにラジオ放送で日本語教室が展開されていた[26]。教員や学生交流もおこなわれていた。教育もきわめて重視され、教科書なども「抗日教科書」が日本の標準に書き換えられていた。だが、華北では日本語の普及について、「上層」への普及が求められていた。

> 華北に於ける日本語は如何なる層にもっとも普及してゐるのであらうか、そして嘗ての、今日の日本における西欧語が最も普及してゐる層と比較してみるがいい。華北に於ける日本語は、苦力言葉とは言へないまでも、決して智識階級、或は上層階級によりよく普及してゐるとは言へないのである[27]。

そこできわめて重視されたのが、「智識階級」を養成して日本へ留学させることだった[28]。彼らは日

---

[24] 木村新「中華民国留学生のための高等学校教育」（『日本語』第 4 巻第 2 号、1944 年 2 月）

[25] 伊藤述史「日本学の可能性について」（『中央公論』1939 年 8 月号）

[26] 逆に、悪質な日本語学校が林立する状況になり、認可制度を導入したほどであった。「教部舉辦日語學校登記」（『新民報』1938 年 2 月 17 日）、「教育界息, 教育部鑒於京津兩地日語學校林立,個中難免有投機份子籍以圖利,貽淆學子,爲整頓及取締計,將擬舉辦日語學校登記,並對日語教員,加以甄別,以期整頓云」（「教育部制定表格調査日語學校 令各省市教育廳局塡報」『新民報』1939 年 8 月 29 日）

[27] 太田義一「華北に於ける日本語の品位」（『日本語』第 3 巻第 7 号、1943 年 7 月）

[28] 戦時下の留日学生については、「共栄圏」全体からでおそらく 7 千名程度であったと推測されているが、その研

本語を身につけて日本に留学し、日本側と華北社会の媒介者として機能することが期待されていたのである。そのイメージは以下のようなものであった。

北支の広東というところに蕉嶺という県がございます。蕉嶺県は非常に治安がよかった県があります。…ここがなぜさういふ風に治安がよろしいかと申しますと、これが非常に教育といふものが治安確保に役立つという一つの例なのであります…これは教育の力と、それから非常に優良な、日本を理解する、従って新政権を盛り立てようとする熱意のある県知事のあることが必要になって来るのであります。これは実は京都大学で留学生のことを担当してうられる方その他とお話した時のことなのでありますが、支那の新政権が送って来た一人の留学生を、本当にその素質のありたけを伸ばしてやって、一年或は二年の後に県知事にして、少なくともこれが苛斂誅求をやらないやうな優秀な県知事を作って下さったならば、蕉嶺のやうな県が直ぐ幾つか生まれて来ると申し上げたのであります。で、私のをりましたところで留学生を二百五十名ここ数年冠送ってをりますが、この一人一人を本当に育て上げて帰して下さったならば、北支の各県までとは申上げられませんが、河北省百三十一県ございますが、百三十一県に百人のいい県知事を入れて下さったならば、これは河北省だけの治安から申しましても、現在のいはゆる治安県を二倍、三倍に拡げることが出来るのではないかと。さうなれば物資の収買は実に簡単なものであります。かういふ点から申しますと、留学生を一人一人日本で念を入れて日本刀をたたき上げるやうに作って向ふへ送り返すといふことは、これは実に重要な問題だと思ひます[29]。

留学生については、「日本国費留学枠」も設けられた。北京市では日本外務省文化事業部から中国教育部を通じて 25 名枠、河北省は 5 名であった。北京では、11 名を教育部直轄の各校院、二つの師範学院附属中学からそれぞれ 1 名推薦、11 名を京師体育専科学校、公立各高級中学、市立師範学校、高級職業学校から各 1 名推薦、残余三名は柔軟に対応するとしていた[30]。河北省は、試験を実施して 5 名選抜していた[31]。選抜されたものは、北京、河北省ともに、『新民報』などに掲載されたのである。他方、自費留学生についても、教育部が「発給留日自費生留学証書暫行条例」などが発布されるなどの管理がおこなわれた（39 年 9 月までに 7 名が自費留学）[32]。

このようにして、「人」を対称にする思想戦、文化戦争が積極的に展開されることになっていた。当時、「新たな文化工作」は以下のように考えられた。

事変後に於ける文化工作は、此の事変の歴史的意義文化史的意義を拡充徹底して、支那の文化的復興と思想的再建、畢竟支那それ自体または東亜自体建直しが眼目でなければならぬ。事変前の、自由主義的な、線の細い、「文化事業部」的文化工作とは、全然面目を異にする所以を知らるべきである。…従って今後に於ける文化工作は、…実に社会各階層共同の仕事なのである。更にまた、新しき文化工作は、支那の現地に在りて支那人を対象としてのみ行はるるものにあらずして、日本国内に於ける一切の文化運動、思想運動も亦そのままに対支文化

究は進んでいない。先駆的な研究としては河路由佳他著『戦時体制下の農業教育と中国人留学生』（農林統計協会、2003 年 ）がある。留学生史研究の近況については、大里浩秋・孫安石編『中国人日本留学史研究の現段階』（御茶の水書房, 2002 年）がある。

[29] 座談会「大陸戦力化と文教の課題」（興亜教育会主事、小倉好雄の発言、『日本語』第四巻第二号、1941 年 11 月）

[30]「選抜赴日学生」、『新民報』1939 年 9 月 9 日）

[31] 「選抜留日学生」、『新民報』1939 年 9 月 12 日）

[32] 「自費留日学生　教部規定推薦法」（『新民報』1939 年 9 月 17 日）

工作の意義を帯びるものである[33]。
華北でこの工作を担ったのは新民会であった。新民会は、満洲国における協和会と比較される組織で、日本人と当地の中国人から構成されていた。同会は、新民学院という学校を開設した。この学校で養成された人材を政府機関などで勤務させていく方針であった。もちろん、日本語学習だけでなく、卒業旅行として日本への観光も含まれていた[34]。

新民会とは別に特に留学生覇権に積極的であった組織がある。それは「留日学生同学会」であった。実は中国には欧美同学会はあったものの、留日学生同学会は組織されていなかった。それを日本占領下で組織したのである。その成立は 1938 年 3 月 15 日であった[35]。この組織こそ、日本語、日本理解を実質的に推進する「人」の養成に決定的な役割を果たすものとして期待されるとともに、その会員は即戦力として華北社会と日本側の間にて機能することが求められた。本来なら、日本留学である必要はないのだが、日本語、日本理解が重視されていただけに、日本留学経験をもつことに大きな意味が与えられたのであった。

ここでは常に会員増加が図られ、職業斡旋などをおこなったほか、留学補助、治安強化活動などの政府の政策の補助などもおこなった。日本語関連でも、日本語教室はもちろん、日本語作文コンクール、日本語等級検定試験の実施母体ともなった。そして、北京のみならず、天津、開封、青島、済南、保定、太原などに支部が設けられた。

この留日同学会がおこなった教育授業としては、興亜高級中学校の設置、運営が有る（1939 年 10 月 6 日開学）[36]。組織は、董事定員 10 名、日中半数で董事会を毎年一回開催することになっていた。。

董事長　朱深
副董事長　別所孝太郎
董事　方宗鰲, 祝書元, 劉玉書, 西村乙嗣,北浦豐男, 原田龍一
校長　殷同　⇒　劉玉書(兼)
校務長　國府種武[37]
学校職員　職員五名、教員八名、講師九名。
学生

	男子			女子		
学級	本科二年	本科一年	予科	本科二年	本科一年	合計
在舎生	13	25	0	0	0	38
通学生	10	12	0	4	0	26
合計	23	37	0	4	0	64

設置場所は、和平門内絨線胡同 45 号の中国留日同学会内に設置（仮校舎）されたが、

[33]中谷武也「対支文化工作の諸問題－新民運動に尽す－」(『文芸春秋』1938 年 3 月)
[34] 第一期生は 1938 年 3 月 13 日に出発している。『新民報』1938 年 3 月 7 日
[35]「留日同學會 成立會程序及本年度工作計畫」(『新民報』1938 年 3 月 13 日)。会員については、留学経験があればよく、大学卒業などの規定は設けられなかった。また日本占領下では明治大学や早稲田大学なども同窓会を組織した。
[36] 国府種武「北京興亜高級中学校概況」(『中国留日同学会季刊』第三号、1943 年 3 月、149－154 頁)
[37] 国府は、植民地における国語教育の泰斗として知られる。『台湾に於ける国語教育の展開』第一教育社、1931 年）などがあり、台湾教育史では主要研究対象となっている。北京での活動については、石剛の研究などもあるが、国府種武「北京興亜高級中学校の歴史」(『法政大学文学部紀要』14 号、1968 年）がある。

1940 年 7 月 20 日に西城兵馬司 38 号、39 号に移っている。設備には理科室、標本室、機械室、工作室のほか、作法室（純粋な日本家屋。基本的に女子学生が利用）、図書室（中国書 1353 冊、日本書 2162 冊。男女の閲覧日を分ける）、寄宿舎などがあった。教育面では、男子には修身、国文、歴史地理、日本語、英語、数学、理科、日本事情、図画、作業、体操などの科目があり、予科 32 時間、本科 35 時間のカリキュラムで、うち日本語が予科は 20 時間、本科は 12 時間占め居ていた。女子は男子とおおよそ同じであるが、別に家事、裁縫、音楽などがあり、その分理系科目が減少していた。ここでは日本語教育と一般教科あわせて二年半の教育があんされ、その後日本の高等学校や専門学校に留学した。留学先には気候や文化理解などを考慮して北方の城下町が選ばれる傾向にあった。また、華北の特殊性を反映して農学系が多いことも特徴である。奨学金は、大東亜省奨学金 55 元、教育総署 50 元となっていた[38]。

おわりに

「日本語」「（日本を「正しく」理解するための）日本研究」は、共栄圏形成にとって不可欠であると考えられていた。「日本語」が理解できなければ「日本文化」の把握は難しいとされ、日本を理解した者が日本の「新秩序」建設に加わることができると考えられ、またそうした者を増やすべきだと考えられた。実際、このような新秩序や共栄圏は、ある種の視覚的、聴覚的な演出の中で日本人に認知されたものであり、その存在は日本人社会ときわめて限定された現地社会の中でした共有されていなかった[39]。だが、そのきわめて限定された領域で日本人の視覚的、聴覚的「共栄圏像」を満たす存在として、日本語ができ、日本を理解する留日学生たちが特に注目されたのであった。本稿では華北に注目したが、この状況は各地で見られたものと思われる。

この戦前の日本語、日本研究への思い入れが 1945 年以後、どのように継承されたのか、あるいは反省されたのか、この点は今後の課題である。他方、日本は 1945 年歴史を断絶させる傾向にあるが、少なくとも留学「させられた」学生たちにはそうではなかった。日本の学生たちは、中華人民共和国政府に忠誠を誓おうとしていた[40] 。彼らの中国への帰国後の人生は、その文革時期の辛苦を含めてしばしば紹介されるところである。これは、たとえ国交はなくとも、台湾の間で争奪戦となった留美学生たちとは大違いである。戦後、留日学生同学会はその活動を停止し、現在でも中国には留日学生同学会はない[41]。欧美同学会の下に留日学生の組織があるに過ぎず、外部には留日学生活動站が設けられている。日本語、日本研究が戦後の中国大陸はじめアジア全体でいかに位置づけられたのか、日本留学経験者がそれにいかに関わったのか、今後の重要な研究課題であろう。（了）

---

[38] このほか、警察関係でも官費留学プログラムが実施されていた。

[39] 拙稿「帝国とラジオ－満洲国において『政治を生活すること』」（山本武利編著『メディアのなかの帝国』〈岩波講座　帝国日本の学知　第四巻〉、岩波書店、近刊所収）

[40] 「中国留学日本同学会总会致毛泽东主席函」（1950 年 3.月 25 日）（中華人民共和国外交部档案、105-00012-01）

[41] 关于美国扣留我国留学生的办法及主要事实（1950 年 11 月 2 日-1952 年 7 月 2 日）（中華人民共和国外交部档案、110-00052-01(1)）、我已归国的留学生反映美国扣留留学生情况（1953 年 11 月 15 日-1954 年 2 月 12 日）、「欧美同学会抗议美国政府阻扰中国留学生回国，1953 年 11 月 5 日」（中華人民共和国外交部档案、110-00052-4(1)）

【表1】北京興亜高級中学校第一期卒業生名簿(1942 年 2 月派遣)[42]

姓名	籍貫	性別	志願學校	姓名	籍貫	性別	志願學校
王毓驟	福建省普江縣	男	專修大學經濟專門部	淳于寶洲	山東省青島市	男	東京商科大學商學專門部
王傑倫	北京	男	專修大學經濟專門部	戴龍驤	河北省濟寧縣	男	東京商科大學商學專門部
王振寰	河北省新城縣	男	東亞學校高等科	張毓保	河北省清苑縣	男	東京商科大學商學專門部
王德新	北京	男	三重高等農林學校	張健	廣東省南海縣	男	第一高等學校預科
關宇	北京	男	仙台高等工業學校	張樹權	山東省文登縣	男	三重高等農林學校
韓廷儒	北京	男	盛岡高等農林學校	方紹慈	廣東省普寧縣	男	東京高等師範預科
季英和	山東省莒縣	男	東亞學校高等科	楊秀發	四川省大邑縣	男	東亞學校高等科
查鳳瀛	安徽省銅陵縣	男	東亞學校高等科	李鴻文	河北省唐山市	男	東亞學校高等科
周樹粗	廣東省開平縣	男	三重高等農林學校	冷兆棟	山東省招遠縣	男	東亞學校高等科
祝更	北京	男	專修大學經濟專門部	崔哈生	河北省樂亭縣	女	東京女子高等師範大學
祝道	北京	男	東亞學校高等科	閔馨	四川省成都市	女	東京女子高等師範大學
徐光	北京	男	盛岡高等農林學校	陸家姒	江蘇省上海縣	女	東京女子高等師範大學

【表 2】留日学生同学会派遣(民国 30 年度)国立各校教職員赴日留学生名簿[43]

[42] 「北京興亜高級中学校第一期畢業生名録」(『中国留日同学会季刊』第一号、1942 年 9 月、184－185 頁)
[43] 「本会民国三十年度選派国立各校院教職員赴日留学姓名表」(『中国留日同学会季刊』第一号、1942 年 9 月、186－187 頁)

選派校院	姓名	性別	年齡	籍貫	出身	現任職務	志望學校	專攻學科
國立北京大學文學院	龔澤銑	男	35	湖南保靖	國立北京大學日本文學系畢業	日本文學系助教	東京帝國大學文學部	日本文學史
國立北京大學文學院	華忱之	男	28	河北大興	國立清華大學中國文學系畢業	國立北京大學文學院文史研究所研究員	東京帝國大學文學部	日本文學史
國立北京大學理學院	關克儉	男	29	河北苑平	國立清華大學生物學系畢業	國立北京大學理學院生物學系助教及講師	東京帝大理學部中井研究室	生物學
國立北京大學理學院	曹吉豫	男	28	河北安次	國立北京大學數學系畢業	國立北京大學理學院數學系助教	東京帝大理學部藤原研究室	數學
國立北京大學農學院	夏元瑜	男	31	浙江杭州	北京師範大學理學院生物學系畢業	國立北京大學農學院副教授	東京帝大農學部	生物學
國立北京大學農學院	楊兆豐	男	30	河北天津	河北省立農學院農藝學系助教	國立北京大學農學院農藝學系助教	東京帝大農學部	農藝
國立北京大學農學院	王貢九	男	29	北京	國立北京大學農學院畢業	國立北京大學農學院畜牧系畢業	東京帝國大學農學部	蓄產學家蓄榮養學
國立北京大學農學院	賈玉鈞	男	35	吉林永吉	國立北京大學農學院畢業	國立北京大學化學系助教	東京帝國大學農學部	農業化學
國立北京大學醫學院	劉治漢	男	36	山西右玉	國立北京大學醫學院畢業	國立北京大學醫學院生物化學助教	東京帝大醫學部	生物化學
國立北京大學醫學院	劉鳳昌	男	40	河北平山	國立北京醫科大學畢業	國立北京大學醫學院眼科助教	東京帝大醫學部	眼科
國立北京大學醫學院	梁瀛	男	35	山西崞縣	國立北京大學醫學院畢業	國立北京大學醫學院內科學助教	東京帝大醫學部	內科
國立北京大學工學院	袁本滋	男	32	江蘇吳縣	馮庸大學畢業	國立北京大學工學院助教	京都帝大工學部喜多研究室	應用化學
國立北京大學工學院	陸葆誠	男	29	浙江相鄉	國立北京大學工學院機械工學士	國立北京大學工學院機械工學系助教	東京帝大工學部 東京工大	機械工學
國立北京師範學校	楊新民	男	43	山東恩縣	國立北京師範大學畢業	國立北京師範學院舍監	東京文理大	教育倫理

【表3】留日学生同学会、第六届理事・幹事・評議員・会務基金委員・事業資金委員[44]

職名	人名
理事	朱深, 王蔭泰,周作人,許修直,余晉龢,汪時璟,張孝移,方宗鰲,李棟,劉玉書,孫潤宇,梁亞平,吳錫永,張心沛,祝惺元,侯毓汶,張水淇,朱毓真,于善述,荊嗣仁,祝書元,喻熙傑,周道曾,鈕光錚,蘇體仁,吳贊周,朱桂山,岳跡樵,藍振德,張仲直,文元模,潘毓桂,
幹事	梁亞平,方宗鰲,鈕先錚,孫潤宇
評議員	趙欣伯,錢稻孫,王養怡,王潤貞,黎世衡,黃曦峰,雍世勛,劉士元,關賡澤,謝子夷,李岐山,程光銘,羅韻孫,陳維廉,范宗澤,關恩霖,凌撫元,周福庭,褚孝雙,張文星,陳達
會務基金委員會委員	王揖唐,朱深,許修直,汪時璟,劉玉書,余晉龢,曹汝霖,孫潤宇,張燕卿,雷壽榮,冷家驥
常務委員	劉玉書,雷壽榮
事業資金委員會委員	武藤章、岡敬純、塩澤清宣、久保田久晴、中西貞喜、松村部長、宇佐美寛爾、船津辰一郎、王揖唐,朱深,曹汝霖,王蔭泰,余晉龢,汪時璟,許修直,劉玉書,蘇體仁
常務委員	鹽澤清宣,朱深

[44]『中国留日学生同学会　季刊』(第四号、1943 年 6 月、142 頁)

【史料1】留学生をめぐる状況

●「支那留学生の料簡」

白鳥庫吉　あれは日露戦争の時かな、支那人の留学生が日本に来たのは。

石田幹之助　日清戦争後ぼつぼつ来るやうになったでせうが、目だって多くなったのは日露戦争以後ではないかと思ひます。

竹田　復　さうですね、一高あたりに沢山来たのは。

白鳥庫吉　日露戦争以後支那の留学生が殖えて、それを相手に学校商売が始ったのですね。

石田幹之助　神田あたりに大分出来た、あれですね。

白鳥庫吉　学校商売で大に儲けようとした。さうするとそれを支那人が見透かしたのだね。だから仲々支那人が威張って、自分等が居なくなれば、日本の学校は立たないだらうといふのだ。大いに学校も優待して居た気味がある。それでは支那人を教育しようとしても駄目で、金を取る主義だといふことを見透かされては、支那人はその方は敏いからね（笑声）

石田幹之助　上は手ですからね。

白鳥庫吉　その時支那人が日本に留学してくる本音を聴いて見ると、日本に来るのは、何も日本の文化を慕って、日本の学術が優秀であるが為に来るのではない。日本人は我々よりは一歩先に西洋の学術を学んだ、それで西洋に行くには費用も掛る、日本に来るのは近いから費用も要らん、滞在費も廉く済むから、西洋の文物を学ぶ為に日本に来る。かういふ訳なんだ。その精神が今日に於ても残って居やせんかと思ふ。

小柳司気太　大に残って居ります。

市村瓚次郎　さうだらうね、どうも日本の固有の文化を慕って来るのではない。

小柳司気太　先般来た支那人の説を聴いて見ると、要するに今白鳥さんの仰しやる通りで、こっちに来て西洋科学なり、技術なりを練習して行けば、直ぐ自分の国が日本のやうに強くなる。かう思って居るから、私はそれは大なる誤った考である、固より日本は西洋の科学なり文化なりを採用して強くなったことは事実であるけれども、決して日本が強くなったのは、それだけで強くなったのではない。まだもっと外に原因があることを知らねばならん。それを忘れて唯西洋のものを真似しても、丁度昔からあなたの国がその流儀があって、実は西洋の文化を輸入することは、日本より支那の方が早い。にも拘らず何時まで経っても却って日本に後れをとるのは、どういふ所に原因があるか、そこを能くあなた方は研究しなければ、唯軍艦を備へた、いや速射砲を備へたからと云ふて、決してその国は強くならない、そこをあなた方お考にならんといかんと云ふたが、白鳥さんの云ふやうに、今でもその考が支那人の頭にこびりついて居る。

飯島忠夫　それは大変面白いお説ですね、それを支那人は考へてもどうにもすることが出来ない。

（「支那学者時局を憂ふ・座談会」、『文芸春秋』1939 年 1 月号）

●「支那留学生の待遇」

赤松克麿（衆議院議員）

それに支那から来る留学生の扱ひ方をモット考へなければいかぬと熟々感じたのです。支那人に会って日本人の良い所を知って居る者は、日本で中産階級的な人と交際した者です。下宿にごろごろして居る連中は、下宿屋から馬鹿にされたりボラれたりして、ジメジメした気持ちで支那人同志で交際して居る。だから日本人の良い所を知らない。日本で好印象を受けない連中が排日になる。…それと反して上海から亜米利加へ留学した大学生は割合に亜米利加に対する印象が好いので

す。ハーバードやエール大学の先生が上海に来た場合には、母校に対する非常な懐かしさを以て盛んな歓迎会をやるのです。日本留学生にはそんなことはない、日本の大学教授が行っても歓迎会をやりはしない。又同窓会などはありはしない。それを近頃のやうに抗日風潮の盛んな関係もあるでせうが、留学生の大半といふものは日本に対して好い思ひ出を持って居ないのです。

（「『見たままの支那』を語る座談会」『文芸春秋』1938 年 7 月号））

【史料2】興亜院華北連絡部『北支に於ける文教の現状』

●（二）日本語教育

日本語の普及は言葉を通して我国に対する親和の情を醸成すると共に、日本精神及日本国情を支那人各界に理解認識せしめ、以て東亜新秩序建設に協力するの精神を培ひ、東方文化の発展振興に資する目的とし、日本語を東亜新秩序に必須なる言葉たらしむ如く普及する方針である。(1)学校に於ける日本語教育　学校に於ける日本語教育の徹底的実施は日本語普及の最捷経である。即ちこの具体的方法として　イ. 学校の種類、程度に応じ最も適切なる日本語教科書を華北政務委員会教育総署直轄編審会をして編纂せしめる。…ロ. 優秀なる支那人日本語教員を多量に養成せしめると共に、努めて日本人教員を各級学校に配置する。…(2)一般民衆に対する日本語の促成普及　イ. 日本語検定制度　現に公私立各機関、団体等に、服務してゐる者及公私立各機関、団体等に服務を志願する者の日本語文学習を奨励する目的で、日本語検定制度を設け毎年一回之が検定試験を実施することになり、その第一回を昭和十六年より実施した。…(3)其の他日本語教育　華北日本語普及協会　本会は華北に於ける日本語普及の中心的指導機関として中央日本語学院を経営し、華北日本語教育研究所を附設して中国人日本語教員の養成並に一般民主に対する日本語教育を行ひ、日本人日本語教員講習会、日本事情紹介講演会等を開催し、又日本語教授法其の他の日本語普及に必要なる事項の研究及其等に関する図書パンフレット等の発行を為しつつあり。

●支那側学校ニ派遣セラレタル日本人教員規範／服務上ノ諸注意

●北支文教指導要綱

第一　指導方針

従前ノ容共抗日教育ノ残滓ヲ芟除シ欧米依存ノ弊風ヲ徹底的ニ是正スルハ固ヨリ、東亜ノ新事態ヲ理解セシメ東亜各国共存ノ必然性及必要性ヲ確認セシムルト共ニ日本精神ヲ中枢トシテ東方固有ノ道徳ヲ顕揚実践セシメ依リテ以テ企図スル新秩序ガ支那及支那民衆ヲ匡救シ大東亜永遠ノ平和ト繁栄トヲ招来スル唯一ノ方途タルイコトヲ深ク体得自覚セシメ以テ東亜新秩序建設ノ根基ヲ啓培セントス

第二　指導要領　六　大学教育専科学校教育ハ其ノ重点ヲ民生向上ノ指導者企画者ノ養成ニ置キ日本人教員ハ常ニ自己ノ思想及学識ニ検討究鑽ヲ加ヘ学生生徒ヲシテ真ニ日本ノ学術及学者ニ対シテ信頼ノ念ヲ抱カシメ自ラ畏敬思慕ノ念ヲ起サシムルヲ以テ要諦トスルコト

八　中等以上ノ学校ニ在リテハ原則トシテ男女共学ハ之ヲ廃セシメ女子教育ニ当リテハ東洋伝統ノ婦徳ノ涵養ニカシメ各級学校ヲ通ジ女子ノ天分ニ鑑ミ　良妻賢母タルノ資質ヲ啓培スルニ専念セシムルト共ニ特ニ思想指導ニ留意セシムルコト

九　日本語教育ニ当リテハ言語ヲ通ジテ我国ニ対スル親和ノ情ヲ醸成スルト共ニ日本精神及日本ノ国情ヲ理解認識セシメ以テ東亜新秩序建設ニ協力スルノ根基ヲ培ヒ東方文化ノ発展振興ニ資セシメ日本語ヲシテ東亜新秩序建設ニ必須ナル言語タラシムルコト

●華北各省市挙行ノ日本語文検定試験暫行辦法

第三条　検定試験ハ程度ノ高低ニ依リ初中高ノ三級ニ分ツ、検定標準左ノ如シ

一、初級　日常ノ挨拶用語ヲ談シ得ルト共ニ簡易ナル中日語ヲ翻訳シ得ル者

二、中級　普通語ヲ談シ、普通交際ノ通訳ニ堪ヘ簡易ナル中日語文ヲ簡潔正確ニ翻訳シ得ルト共ニ短篇日本文ヲ作リ得ル者

三、高級　第一、第二ノ両類ニ区分シ第一類ハ言語ニ重キヲ置キ第二類ハ文字ニ重キヲ置ク、其ノ検定標準左ノ如シ

第一類　自由ニ談話シ得長篇ノ講演通訳ニ堪ヘルト共ニ普通ノ中国文及日本文ヲ翻訳シ得原文ノ意義ヲ失ハサル者

第二類　中日長篇短篇論文ヲ簡潔正確ニ互訳シ得ルト共ニ長篇ノ日文ヲ作リ得且普通言語ヲ解スル者

第八条　検定試験合格者ハ省市教育庁局ニ於テ公布スル外各省市公署公報及華北政務委員会公報ニ夫々登載ス

（興亜院華北連絡部『北支に於ける文教の現状』1941 年 7 月、興亜院華北連絡部、80－103 頁）

【史料3】中国留日同学会の留学事業への関与

二，曰事業　本會承各方捐助資金,以之興辦事業,本研究學術發揚文化之宗旨,依照計畫成案,次第實施,以切於實際,擇尤舉辦,故對於作育人才,介紹學術,及溝通中日兩國文化,無不努力進行,遂於民國額二十八年八月,首先創辦興亞高級中學校,培育優秀青年,準備赴日留學,成立之後,即招收男女學生,分班授課,所有教授方法,訓育方針,隨時研討改善,去秋擴充校務,慎重學歷,經請託華北各省市選拔學生,前後錄取三十二名,分別編級受業,同時並爲推行全市中學生日語普及起見,懸獎徵集各中學日語作文,以資觀摩,頗著成績,第一期畢業學生,已於本年二月保送赴日留學,以宏造就,次爲促進中日文化交流,經與華北教育總署商洽,由本會資助國立國立各校院教職員東渡留學,每年分爲兩期,第一期自民國三十年九月至三十一年二月,由本會補助學費及旅費共計八千四百元,經教育總署選拔龔澤銑等十七名,於去年九月十日出國留學,此外舉行講演會,擬定每月一次,除本會會員外,其他各界人士亦參加聽講,再次如籌設圖書室,蒐集中外各種圖書,以備研究,出版刊物,交換學識,以及補助平民教育,提倡文化事業等項,亦爲本會職責所在,將盡力之所及促其實現「本会会務事業進行之概況」（『中国留日同学会季刊』第一号、1942 年 9 月、179-180 頁）

【史料4】北京興亞高級中學校概況

<總括>本校爲留日學生之預備教育而設，修業年限係豫科半年,本科二年,初級中學校卒業者,即可入本校．預科及本科所教學之課程標準,男子部依日本中學校第四五學年之課程標準進行，女子部依高等女學校第四五學年之課程標準進行．凡卒業學生全部俱有由教育總署選拔赴日留學之資格，由教育總署之留學資金及大東亞省之補助費，供給官費，投考日本之高等學校,大學預科及專門學校等.

<教育方針>教育方針以教育留日學生爲目的，並盡力教授日本語與自然科學.日本語預科一禮拜二十小時，本科一禮拜十二小時．預科施教辦法，爲由日本國民學校教科書，以至中學教科書,使能讀普通新聞雜誌，或聽日本語講義，能用日本語答卷之程度．自然科學教授之方面，從來中國教育是僅止於暗記教科書，缺少實驗方面之遺憾，故以教授實驗爲主題，使學生入日本學校後,對於學習方面減少困難．對於理科之設備如前所述，相當完備，用如許標本,機械,器具使之觀察測驗與熟習機械之操作.至於數學教育，從來中國普通學校之學生能自己苦心

去解答問題者甚少，全是被動之態度.本校以學生自解問題爲課業,以自動學習爲目的,並且入學後半年在入本科時，所有之各科儘量使其對各學科皆能用日本語聽講.學校之教育全部以增進日本語之程度爲計畫者.

（国府種武「北京興亜高級中学校概況」（『中国留日同学会季刊』第三号、1943 年 3 月、149 頁）

●（三）中国人日本留学生

中国人の日本留学生は昭和十四年四月の調査に依れば約一万三千名であるが、此の中華北出身者の数は目調査下中で適確なる数字は得られないが単に出身省別に依る華北の数は大体に於て千数百名と推定せられるのである。事変発生以来華北に於ける日本留学熱の頓に高まりつつある実情は時局の進展に伴ふ反映であって日支文化提携上喜ばしい傾向である。昭和十四年三月の東京帝大始め各帝大、官立大学、私立大学及び官、公、私立各専門学校の卒業生は五一名であって同年の在学者は二三四名である。日本留学者の為予備教育をなす機関として北京興亜高級中学校がある。初級中学卒業者を収容し予科半年本科二年、日本語を多分に加味した高級中学の課程を履修せしめ、日本留学の準備教育を施している。

設立者：留日同学会／設立年月：昭和十四年九月一日／校長：殷同／所在地：北京市西城兵馬司胡同三八号／教職員数：教員二一名、職員五名／学生数　男五三名、女一五名／分科：予科、本科／卒業年限：予科半年、本科二年

（興亜院華北連絡部『北支に於ける文教の現状』1941 年 7 月、興亜院華北連絡部、103－104 頁）

【史料5】興亜高級中学卒業生を外務省文化事業部補給生とする件

●「中国留日同学会経営興亜高級中学校卒業生ヲ外務省文化事業部補給生ニ選定ノ件」

昭和十四年九月三十日小林記　渡邊嘱託　中国留日同学会経営興亜高級中学校卒業生ヲ外務省文化事業部補給生ニ選定ノ件

九月三十日興亜院林書記官、興亜院華北連絡部朝比奈書記官来訪後藤書記官並小林嘱託面接ス談話ノ要領左ノ通　記　一、中国留日同学会経営興亜高級中学校卒業生ヲ昭和十七年以降毎年約三十名宛本邦ニ留学セシメ高等学校、大学又ハ専門学校ニ入学セシメ度ニ付右学生ヲ外務省文化事業部学費補給生ニ採用セラレ度　右ニ関スル予算ハ別紙ノ通　右ニ対シ後藤書記官ハ承諾セリ　二、朝比奈書記官ヨリ中国ノ留学生中外務省文化事業部補給生ヲ採用スルニ当リテハ右高級中学校卒業生ノミヲ採用セラレ度シト話アリタリ

右ニ対シ小林嘱託ハ当文化事業部ノ補給生（支那学生）ハ中国政府ヨリ在支本邦公館ヲ経テ推薦アリタル者ニ限リ採用スルコトト致居ルニ付推薦方ヲ其ノ様取計ハレ度ト話置タリ　以上

（アジア歴史資料センター・レファレンスコード：B05015477400、日本外務省保存記録 B-H-05-02-00-01-01-00-02）

●昭和十四年九月十八日　在中華民国（北京）日本国大使館　参事官　堀内干城ヨリ外務大臣　阿部信行宛「興亜高級中学校卒業生ヲ抜選留学生トシテ採用方稟請ノ件」

今般中華民国臨時政府教育部総長湯爾和ヨリ爾今留日中国留学生ノ質的後退ニ顧ミ特ニ当地中国留日同学会ヲシテ留日学生ノ質的向上ヲ目標ニ興亜高級中学校ヲ設立セシメタル処右高級中学ハ修業年限ヲ二年六個月ト定メ華北各地高級中学卒業者中成績特ニ優秀ナル者ノ中ヨリ毎年三十五名詮衡ノ上入学セシメ入学ノ上ハ之レニ厳格ナル留学準備教育ヲ施シ卒業ト同時ニ本邦高等学校或ハ大学専門学校ニ入学セシムル予定ナルカ派遣学生数ハ就学期間中健康学業ノ不良或ハ其ノ他ノ事由ニヨリ落伍スルモノヲ考慮ニ入レ毎年三十名程度ニ減少スルモノト思考サレ実際本邦派

遣員数ハ三十名以内ニ於テ派遣スルヲ原則トスルト同時ニ右派遣学生ハ華北各地高級中学卒業者中最優秀者ナルヲ以テ教育部ニ於テハ特ニ中華民国臨時政府教育部派遣選抜留学生トシテ之レヲ待遇スル事ニ決定スルヲ以テ外務省文化事業部ニ於テモ之レヲ選抜留学生トシテ採用ノ上右学生三十名ニ対シ学費支給斡旋方別紙訳文ノ通依頼越セルニ付右興亜中学校ノ目的ト特殊性ヲ御賢察ノ上華北五省ニ対スル選抜留学生割当総数七十五名ノ外更ニ右三十名ヲ興亜高級中学校ニ割当ラルル様致度右特別ノ御詮議相煩度此段稟請申進ス

（アジア歴史資料センター・レファレンスコード：B05015477400、日本外務省保存記録 B-H-05-02-00-01-01-00-02）

●昭和十五年五月十一日　興亜院総務長官　外務次官殿　興亜高級中学卒業生ヲ外務省選抜留学生トシテ採用方ノ件

…今般治安ノ回復ト同校ノ設備内容ノ充実ニ依リ本年度以降ニ於テハ男子三十名女子十名ノ合名四十名ノ卒業生ヲ出ス予定ノ下ニ募集人員ヲ増加致度同校卒業ノ上ハ右人員ヲ貴省選抜留学生トシテ御取計相成様特別ノ御詮議ヲ得度此際御依頼申達ス

●昭和十五年五月十三日起草　有田大臣ヨリ在北京藤井参事官宛　興亜高級中学卒業者ノ選抜留学生ニ採用方ノ件

…風評ニ依レバ全校ハ支那人側ノ評判宜シカラス志願者モ少ク優良学生ハ入学志望セサル由聞キ込ミ居ル次第モアルニ付…

（アジア歴史資料センター・レファレンスコード：B05015477400、日本外務省保存記録 B-H-05-02-00-01-01-00-02）

●学生選抜の状況

奴隷化教育を学校で順調に行うために、要求に合った教員の養成もした。一九三八年四月一日、新民会は北平に中央級に属する「中等教育教師講習館」を設立した。養成人員の多くは大学生で、毎期一〇〇人程の学生を募集した。養成期間は初めは三ヶ月で、学生はみな寄宿し、厳格な規則があった。また「奨学金」を設け、期間終了後、三分の二近い学生を選んで日本を「参観」「視察」させ、その後、この中から「優秀」者数人を選んで、官費で日本の東京高等師範学校で二年から三年学ばせた。学生が競って日本の忠実な奴隷になるように刺激したのであった。学生は卒業後、河北省、河南省、山東省等に割り振られて、県の中小学校校長になった。

（果勇「華北占領区の新民会」、北京市政協文史資料研究委員会編・大沼正博訳・小島晋治解説『北京日の丸－体験者が綴る占領下の人々』岩波書店、1991 年所収、44 頁）

【史料6】警察官の留学について

北京警察局の課員以上の中上層官吏は、「留日派」「東北派」「警高派」「元老派」に大別できる。この四派の消長が一九四一年大改組の主要な指標になった。それぞれについて述べてみよう。【留日派】一九三八年以来、華北治安総署警政局が毎年日本内務省警察講習所に送った留学生。北京警察局が採用する者は毎年六、七人いた。毎期東京の警察講習所で一年学習した。ここは日本警察の最高教育機関で、所長は内閣官房長官が兼任した。日本人学生の多くは警察署長級で、在職のまま訓練を受けていて、日本の法学と警察業務を系統的に学習した。留日学生は帰国後、ふつうものとの職場に戻り、局員、課員、監察員等の職について。彼らは正規の日本の警察教育を受け、日本語も話せたので、奴隷化の程度も深く、日本侵略者にとくに信任された。一九四一年の大改組で、「留日派」の大部分が係長、課長、分局長に昇進し、警務課長孫雲章、特務課長周福庭、内一分局

長宋湯揚、内六分局長竇以鋳、監察室主任劉志揚等は、みな警察局の中核勢力になった。
（向風「占領下の北京警察局」、北京市政協文史資料研究委員会編・大沼正博訳・小島晋治解説『北京日の丸－体験者が綴る占領下の人々』岩波書店、1991 年所収、20-22 頁）

【主要同時代史料】

〈一次史料〉 新民会関連档案（北京市档案館所蔵、新民会それじたいの档案は非公開、関連部局の档案で新民会と往復した文書など）

日本外務省保存記録、中華人民共和国外交部档案

〈公刊史料〉

北京市档案馆编《日伪北京新民会》（光明日报出版社，1989 年）

南开大学历史学部/唐山市档案馆编《冀东日伪政权》（档案出版社，1992 年）

天津市委党史研究室/天津市档案馆《日本在天津的殖民统治》（天津人民出版社，1998 年）

「北平陸軍機関業務日誌－自昭和十二年七月八日至同年七月三十一日」（『太平洋戦争・四』、現代史資料 38、みすず書房、1972 年）

防衛庁防衛研究所戦史室編『北支の治安戦』（朝雲社、1971 年）

〈新聞雑誌類〉

『新民報』（北海道大学総合図書館所蔵）

『新民週刊』（北海道大学総合図書館所蔵）

『中国留日同学会　季刊』（中国科学院文献情報資料中心所蔵）

『新民会年報』（1938 年、富山大学経済学部資料室所蔵、旧高岡高商蔵書、⇒筆者未見）

『中央公論』『文芸春秋』『日本語』など

〈そのほか公刊史料〉

興亜院華北連絡部『北支に於ける文教の現状』（1941 年 7 月、興亜院華北連絡部）

興亜院華北連絡部文化局編『華北農村教育調査報告－ 冀東農村地方の中等教育冀東冀南の農村初等教育』（興亞院華北連絡部文化局、1940 年）

駐華日本大使館文化課『北支に於ける文化の現状』（在北京日本大使館文化課、1943 年）

⇒上二点は佐藤尚子ほか編の中国近現代教育文献資料集の一部として日本図書センターから 2005 年 10 月に復刻）

成田貢『中華民国新民会大観』（公論社、1940 年）

宋介「新民運動の理想」（『文芸春秋』1939 年 2 月号）

朱泉「北京生活学校訪問記」（『文芸春秋』1938 年 9 月号）

三好達治「満洲国留日学生会館訪問記」（『文芸春秋』1938 年 7 月号）

「『見たままの支那』を語る座談会」（『文芸春秋』1938 年 7 月号）

「支那学者時局を憂ふ・座談会」（『文芸春秋』1939 年 1 月号）

「外地の日本語問題を語る」（『文芸春秋』1939 年 12 月）

松岡孝児「北支民衆工作の基礎問題」（『文芸春秋』1939 年 9 月号）

梨本祐介「中華新政権の歴史的使命」（『中央公論』1938 年 2 月号）

「新支那の揺籃」（『写真週報』1938 年 7 月号）

中谷武也「対支文化工作の諸問題－新民運動に尽す－」（『文芸春秋』1938 年 3 月号）

小田嶽夫「北支新教科書」（『文芸春秋』1938 年 3 月）

橋川時雄「日支文化工作の観点」(『中央公論』1939 年 11 月)
【回想録】
那須清『北京同学会の回想』(不二出版、1995 年)
鐘少華編著・泉敬史、謝志宇訳『あのころの日本－若き日の留学を語る』(日本僑報社、2003 年)
中国人民政治协商会议北京市委员会文史资料研究会编《日伪统治下的北平》
(北京出版社，1987 年)
北京市政協文史資料研究委員会編・大沼正博訳・小島晋治解説
『北京日の丸－体験者が綴る占領下の人々』(岩波書店、1991 年)
北京市政协文史资料委员会编《日伪统治下的北京郊区》(北京出版社，1995 年)
竹内好「北京日記」(1937 年、『竹内好全集』15－16 巻、筑摩書房、1981 年に再録)
岡田春夫編『新民会外史－黄土に挺身した人達の歴史』(五陵出版社、1986 年)
邢汉三《日伪统治河南见闻录》(河南大学出版社，1986 年)
梨本祐平『中国のなかの日本人』
(初版、平凡社、1958 年／第二版、同成社、1969 年／第三版、同成社、1993 年)
国府種武「北京興亜高級中学校の歴史」(『法政大学文学部紀要』14 号、1968 年)